暇な図書館

黒川 文

COURS DE PHILOSOPHIE POSITIVE A. COMTE
MORAL PHILOSOPHY
DUTIES OF MEN
GISBORNE
VOL. I
DUTIES OF MEN
GISBORNE
VOL. II
DUTIES OF WOMEN
GODWIN THOUGHTS ON MAN
GROTE'S PLATO
VOL. I
www.comipo.com

目次

1.
1. 3

2.
2. 11

3.
3. 19

4.
4. 25

1.

1.

　閉館時間五分前になり、わたしは館内に残っている人がいないか確認を始めた。と、そんな大層な作業ではない。小さな図書館の貸し出しカウンターから見えない、奥の書架の陰に誰かいないか見てくるだけのことだった。順番に書架の間を見て回り、奥の窓側通路との間に人がいたときにはびっくりしてしまった。よくあることだが、誰もいないと思って注意がよそに行っているときに、不意に視界に何者かが入ってきたら、慌てまいとしても反射神経がさきにびくっとしてしまう。
　わたしは、目の前の侵入者にそのびくっとした反応を見られたことに一瞬恥ずかしさを覚えた。

「お嬢さんは新米だな」
　どう見ても骸骨の様な、老婆だった。手首は骨と皮だし、首筋などはミイラと化していた。彼女は枯れた気管から出る低い声で、わたしを新米と呼んだ。
「閉館時間なんです」
　新米だろうが、今日配属されたばかりだろうが、五時で閉館するのは規則だった。
「あと五分ある」
　老婆はそう言い切って、窓枠に腰掛けたまま、指の先を乾いた舌先でぺろりとなめて雑誌のページを繰った。わたしは、何か言い返そうとしたが、無口な老婆は完璧にわたしを無視して二度と反応を示さない。

　カウンターに戻り奥の事務机に向かっていた館長の大前さんに、一人だけ残っていると報告すると、一瞬、役立たずめという表情になったが、わたしが奥の書架を目で追うと、彼は、ああ、とうなずいた。
「御存知の方なのですか？」
　わたしは館長に初めての質問をした。わからないことがあったら何でも聞くようにと、配属の挨拶をした際に言われたが、やりはじめた仕事でそうそう質問など思いつくものではない。そのうち、思いつく頃には質問など出来ない立場になるのだ。
「御存知かと言われても、知っているとも言えるし、知らないとも言えるかな」
　館長はとぼけた返事をした。新入りの女子職員をからかって楽しむタイプの上司の様だった。
「ご親戚ですか？」
　わたしもとぼけて嫌みめいたことを口にした。

「いや、昔からこの図書館の常連らしいよ。僕も詳しいことは知らないんだ。今までの職員すべてが見たことのあるわけでもない。それに老婆だという人もいれば、おじいさんだという人もいる。いつもはね、.....開館時間の十時になると現れて、五時になるといなくなるんだ。幽霊だという人もいたな。ほら」

館長がわたしを驚かせようとして、そんなことを言うんだと思い、また、奥の書架に恐る恐る見に行くと、すでに人の気配はなく、雑誌もホルダーに収められていた。わたしは何だか気持ちが悪いと思った。館長と話していた貸し出しカウンターの前を通らずに図書館を出ることなど不可能と思ったからだ。

何となく背筋がぶるるっと震えた。

その日、わたしは家に帰るやいなや、母に事の次第を話さずにはいられなかった。

父の紹介で図書館の臨時職員になったのだが、わたしが想像していた以上に田舎で小さな図書館に配属されてしまったこと。館長の大前というおじさんと二人っきりの職場であること。蔵書が大してないこと。

そして、朝十時から夕方五時まで住み着いている骸骨のようなおばあさんのこと。

しかし、母は夕食の用意をしながら、わたしの言うことなど話半分にしか聞いていない様だった。

「骸骨がどうしたって？」

「だから、図書館にいるんだってば」

「まさか」

さすがにお化けみたいなおばあさんの話では信用してもらえなかった。それからもう一つあった。まだ、一度も会っていないのだが、わたしとは違う市民ボランティアで日曜だけ山田さんという男の人がいるらしかった。普段は別の勤めをしていて、休日だけ図書館で仕事をするらしい。

「お母さん。そんなことしたら、わたしの存在意義が問われかねないと思わない？」

わたしがそう言うと、母はおかしそうに笑った。

「おかしな子ねえ。その人は好きでやっているんだからいいじゃない」

「よくはないわ」

そうなのだ。図書の貸し出しと、返却された本を書架に整理して戻す作業の他に、大きな書架の入れ替えや、毎月の新刊の注文という作業もある。こういった仕事はもっぱら館長一人か、山田さんの仕事になるのだ。臨時職員とはいえお給料をもらってやるからには何かボランティア以上の存在意義がないと寂しい気がする。

七時になると父が市役所から帰ってきた。わたしは玄関に走っていき、さっき言った同じ事を繰り返そうとしたが、軽くかわされた。

「今日は友香《ゆか》の就職祝いだな。赤飯でも炊いたのか？」

「そんなことしてないよ。小さな図書館だし、お客さんもいないし」

「そんなこと関係あるもんか。友香のお祝いなんだから盛大に行こう」

昔から父のこういう所が好きだった。わたしがしょげたり、卑屈になっていると盛大

に乾杯して励ましてくれる。

　でも、父が唯一わたしに秘密にしていることがある。わたしが本当はもらい子だということだ。証拠はないが、献血に行くことも禁止されているし、わたしが血液型を調べようとすることを極端におそれているのだ。
　わたしは親しい友人にはこのことを吹聴し回っていた。他人に話すことで少しでも恐怖感を和らげようとする無意識の行為だ。

　次の日も、その次の日も、わたしは老婆を何度か目にしたが、勇気を出して話しかけようとすると別の誰かが、――あの、すみませんと話しかけてくる。
「はい、何でしょうか？」
「このメモにある本を探しているのですが」
　小学生くらいの男の子が、メモを差し出した。聞いたことのない書名だった。もちろんこの図書館にはなさそうだ。わたしは著者の仮名順に並んでいる書架を順に目で追っていった。出版社も何も一緒くたに蔵書されていたが、少なくとも小説と実用書の区別くらいはしていたのにわたしは気がつかなかった。
　不意に書架から顔を出したのは、あの骸骨だった。
「ほら、これだろう」
　骸骨が出したのは、小さな黄ばんだ表紙の文庫本だった。
「あの、これ？」
「西田幾多郎博士の『善の研究』と言えば、その筋では有名な著作じゃ。覚えておきなさい」
「はあ、どうも。僕、これでいいの？」
　少年は骸骨と文庫本を交互に目で追いながら、おびえた顔でうなずいた。
　貸し出しカウンターでわたしが少年の貸し出しカードを預かり、手続きし、二週間後までですと手渡した。
「僕が読むのかな？」
　話しかけやすそうな少年だったので聞いてみた。彼はうなずいた。わたしは本気にしなかった。旧かなづかいの書物だし、書いてあることは全く理解できないし、少なくとも小学生が読むようなものではないと思っていた。ひょっとしたらあの骸骨の孫かも知れないと疑いだしたら、彼は本をリュックに入れて背中に担ぎ、回れ右して行ってしまった。

　さっき、骸骨がいたのは哲学・宗教の本が置いてある書架だった。わたしはまだ、彼女がいるかなと思い、そこに行ってみたが、すでにそこにはおらず、また、いつもの奥の窓側通路で窓枠に腰掛けて雑誌を読んでいる。
　ひょっとしたら人間ではなく図書館の主かも知れない。そうだ、大きな古い池や沼にも鮒から化けた「池の主」っているじゃないか、と同じように、古びた図書館にもそう

いうのがいてもいいような気がしてきたのだ。きっと、本の間に住んでいる虫を食べて生きているに違いない。だから、あんな骸骨みたいな姿をしているんだ。

　わたしがすっかりこの図書館に慣れた日曜日、市民ボランティアの山田さんはやってきた。正確に言うと、わたしより三十分以上早く出勤していた。
「日曜だけお手伝いさせていただいています。山田信之です。よろしく」
「こちらこそ」
　わたしは、相手の方が先輩だけど、単なるボランティアで図書館員はわたしの方だと、複雑な気分で彼を迎えた。もっとも、配属したての一週間前なら混乱した気分にはならなかっただろう。

　書架に返却された本を戻す作業をしているときに、山田さんが話しかけてきた。
「今度、新たに哲学書のコーナーを充実させるらしいんだ。でも、新しい棚の余裕があるのかな。駄目なら、誰も借りない古い本を倉庫に片付けることも必要かも知れないね」
「駄目ですよ。ここには図書館の主がいるんです」
「主？」
「ええ、何十年も前から住み着いている骸骨みたいな」
「あはは、面白いことを言うお嬢さんだな」
「お嬢さんなんかじゃありません」
　少し嫌みな口の利き方に、普段はおとなしいわたしもついかっとなった。
「へえ、でもお父さんは市役所のえらい人じゃないの」
　山田さんははっきりと、言ってはならないことを口にした。父のコネで入れてもらったと館長以外には知られてはならないことだったのだ。わたしは頭に来たが、そのとき、思いも掛けない言葉がすらすらと口をついて出てきた。
「あれは、本当のお父さんじゃありません」
「え？　　あれ、じゃあ、余計なことを聞いちゃったのかな」
　山田さんは何か勘違いしたのか、頭をかきながらわびを入れた。
「だから、隠し子なんかじゃなくて、捨て子だったんです」
「変な人だな。そんなこと僕に話さないでよ」

　邪魔くさそうにわたしを振り払おうと、――そういう冗談は言う物じゃない、と手厳しい口調でわたしをたしなめ、おもむろにポケットからメジャーを取り出し、書架の幅を計った。哲学書の置いてある幅、きっちり八十五センチをメモしてまた、大前さんのいる方に戻っていった。

「くだらん冗談は言わないことだ」
　背後で骸骨の声がして、わたしは驚いて振り向いた。分厚い百科事典を持っていた。

「あ、あの、くだらない冗談って？」
「現在の父親が、本当の親ではないと言ったな」
「え、あ、あれは、つい」
　普段、誰彼構わず吹聴して回っていることだが、骸骨の視線に射抜かれると根拠のないことは一言も言えなくなってしまった。
「戸籍に長女と載っていれば、お前さんは父親の実の子じゃ。ま、例外もあるがな」
　骸骨はくだらない冗談を言うなと言いながら、自身は例外もあるなどと物騒なことを言い出した。そんなことを言われたらわたしの立場など吹き飛ばされてしまう。でも、短大に入るときに自分で戸籍謄本を提出して中身を確かめてあるので、実子であるのは確かだった。いや、そう信じていた。
「例外って何ですか？」
「まあ、調べてみることだ。せっかく図書館に一日中いることだし。ふぉふぉふぉ」
　骸骨が初めて笑った。笑顔にはなっていなかったが、そんなこととわたしの不安とは無関係だった。昔からおそれていて、一安心して自分を納得させていたものがまた心の中で増幅してきた。

　骸骨はさっき、分厚い百科事典を持っていた。さっきの少年のために探した哲学書もそうだが、まるでこの図書館のどこにどんな本があるかを全て頭の中に暗記しているかの様だった。だとしたら、さっきの百科事典は自分の話していた内容に関する物に違いない。
　わたしが骸骨が抜き出した書架を探しに行くと、誰も利用していない法律関係の書架だった。百科事典と思ったのは家庭の法律に関する一般向けの解説書のようなものだった。ぽっかりと相続法と民法総則の巻に囲まれて一冊だけ抜けていた。いま、骸骨がうれしそうに読んでいるに違いない。わたしはあきらめて、他の法律全集を探し、抜けているのが親族法という家族関係に関わる法律の部分だということがわかり、不安感がさらに増していった。きっと、もらい子でも実子にしてしまう技があるというに違いないと思った。骸骨が本物の悪魔に思えた。

　そして何冊かの古い法律書には載っていなかったが、新しいものには記載されていた。
　「特別養子縁組制度」と言う昭和六十二年から導入された制度で、これを使うと、戸籍には養子ではなく実子として記載され、書類上は完全な親子になるというものだった。
　わたしの悩みがまた頭をもたげてきた。書類上は確かに完全な親子関係があったからだ。そして、献血することを頑なに拒む父親の態度をあわせて考えると、やはり、もらい子だったのかという結論に達してしまう。

「一ノ瀬さん。カートが置きっぱなしですよ」
　不意に山田さんに注意された。さっき、本を書架に返す作業をしていて、骸骨と少年

に妨害されてしまい、すっかり気持ちは吸い寄せられてしまっていた。
「すみません」
　わたしは慌ててカートに残っていた本を手に取った。どこから見ているのかわからないが、骸骨の視線を背中に受けながら、あたふたと本を書架に収めていった。

　お昼になり、館長が貸し出しカウンターを代わってくれて、わたしは山田さんと奥のデスクでお弁当を食べた。彼はコンビニエンスストアでコロッケ弁当を買ってきていた。パイプ椅子を出してきてデスクの横に座り、ふたを取るとわたしの十倍の速度で食べた。
「あのさ、君ももらい子恐怖症なの？」
　漬け物を口に入れかけて不意にそんな質問をわたしに投げかけた。
「どういう意味ですか？」
「子供の頃って、幸せそうでもみんな、実際は本当の親は別にいてなんて思っているものなんだよ。でも、いつしか空想だと気づくか、忘れ去ってしまっている。僕も実はどこかの王様の一人息子で大きくなるまで下々の生活を味わうために預けられているんだと信じていたこともあったね。さっき思い出した」
「そうですねえ」
　わたしは曖昧に返事をした。本当はそんな空想じみた悩みではなく、もっと実感のこもったもの、でなければならないのだ。そんな生半可な悩みではないのだが、わたしのことを邪魔に思っている山田さんにそんな悩みを打ち明ける気にはならなかった。
　真剣に悩んでいるのを茶化されるのは、心の神聖な領域まで侵されることを意味するのだ。相手にしないことにした。あれやこれやと、作業を手伝ってくれるのは有り難かったが、わたし個人としては迷惑な行為だった。

2.

2.

五月になり連休明けになると、わたしもすっかり仕事に慣れ、いつ昼食を執るのに抜けていいかなど、いちいち館長に聞かずに抜け出すことが多くなった。隣に文化ホールがあるので何か催し事をしているときには、結構ごった返している。その人たちの間をすり抜けて自動販売機でお茶を買ったり、近くのコンビニエンスストアにお弁当を買いに行ったりするのも楽しみになってきている。

その頃から、家にいる母の顔色がすぐれないのに気づき始めた。

しばらく前から、起き上がるときに、どっこいしょと口にし始めていたし、階段の上り下りの際にも息を切らせるようになっていた。

「もう、年なのかな？」

と、四十代半ばの母に言ったらやはり怒られた。

「ちょっと、熱があるだけよ。オーバーなこと言わないでね」

「ごめんなさい」

このとき、普段はきれいな瞳なのに、少し黄ばんでいるように感じた。やはり、おかしい。

そして、その夜とうとう廊下で倒れ、意識を失ってしまった。

パニックになったわたしを放っておいて父が救急車を呼び、付添人として一緒に乗り込んだ。救急隊員にひょいと軽く持ち上げられて担架に乗せられ、そのまま家の前の救急車の後部ハッチから担ぎ込まれた。その間、赤いランプがくるくると回り、わたしは何かしなければとあっちへ行ったりこっちへ行ったりしていた。まるで、飼い主が見えなくなった飼い犬の様だった。

することがわかったのは、父からわたしの携帯電話に連絡が入った後のことだった。

「友香か？」

「お母さんは、大丈夫なの？」

「心配ない。しばらく入院することになったから、保険証と認め印、替えの下着を持ってきてくれないか。西市民病院だ」

「うん、わかった」

電話を切った後で、わたしは最初に保険証を探し始めた。母が管理している生活費用の財布の中にカード類と一緒に保管されているはずだと思ったのだ。台所の棚の奥の引き出しをがさごそと探し、引っかき回したが保険証は入っていなかった。

――あれ？

普段から整理整頓が行き届いている母にしては少し変だった。大事なものなのになく

すはずはないし、家族全員が使うものだからよそにしまってしまう訳がない。もしかして、最近、母が使ったのではないかと思い至った。

わたしは二階の母の寝室に行き、普段使っているバッグを探した。黒い革の大きめのサイズで、五年ほど前にオーストラリアで買った物を大事に使っていた。バッグを見つけ、中を探ると案の定、保険証と近所の内科医院の診察カードが入っていた。発行日付は今月で、多分、自分でも体調が悪いと思って自分で行ったに違いない。

わたしは、保険証が見つかったことに安心し、他のことには気が回らず、父からいわれた入院用の下着類を紙バッグに詰め込んた。先にタクシーを呼んでおけばよかったのだが、こういう所は要領が悪かった。電話帳を見て近くのタクシー会社に電話し、さっき整えた紙バッグを持って玄関のところで待った。

――こんな時間に来てくれるのだろうか？　という、そこはかとない不安が脳裏をよぎった。

病院までの道のりは遠く感じた。ほんの五キロだったが、前を行く乗用車が普段より遅く感じたり、夜間で赤く点滅している交差点で、いちいちタクシーが一旦停止して横から出てくる車に順番を譲ったりするのがもどかしく感じた。

――すみませんねえ、最近は信号の取り締まりも厳しいもので。お急ぎですか？

わたしが運転手だったら、そのくらいのことは言うだろう。しかし、彼は何も言わずにブレーキから足を離してアクセルに踏み換えた。陽気に話しかけられても困るが、無口なのはもっとやきもきしてくるのだ。

病院の車寄せについたとき、さっきから指でいじっていた紙バックのひもが少しささくれ立っていた。わたしは料金を払い、タクシーを降りると、病院の夜間通用口へ飛び込んだ。

夜の病院は迷路だった。誰も廊下にいないし、行き先表示も見にくい。かろうじて明かりを頼りにナースセンター（看護師詰め所）までたどり着き、用件を告げた。

「あら、一ノ瀬さんの身内の方ね？」

「はい、娘の友香です」

別に自己紹介をする様なシチュエーションではなかったが、娘と言うことを強調した。担当の看護師が案内してくれた。彼女の名札の所属欄には救急病棟とあった。友香とそんなに年齢は違わなそうで、多分、救急病棟は体力仕事が多いから若い人が多く配属されているんだと思った。

母は昼間には大したこともない風に言っていたのに、母を目にしたときには、誰かわからないくらいに弱り切っていた。

「お母さん！」
　今まで心配させられた分、つい、声を荒げてしまった。横で椅子に腰掛けて居眠りしていた父が目を覚まし、わたしは手を引かれて廊下につまみ出されてしまった。
「いつまでも、子供じゃないんだ。見たらわかるだろう」
　父は珍しくわたしを叱った。
「お母さんどうなるの？」
「どうなるって、……肝臓に菌が入って発熱しているそうだ。だから熱が下がるまで抗生物質を点滴している。静かに見守っていよう。な？」
　わたしは、――うん、とうなずくしかなかった。
　母が少し目を開けた。
「来てくれたの？」
　母がしゃべれることを知ると、涙が出てきた。
「悪かったわね、手間を掛けて」
　ベッドの上で点滴で固定されているために、わたしたちの方を見ることが出来ず、上を向いたまま喋りにくそうに、それだけ言った。
「ううん」
　わたしは、ベッドの横にあるサイドテーブルの下についている小さなロッカーに、普段着を下にして、下着、タオルと順に重ねていった。保険証は父に渡した。どのくらい入院すればいいのか、どのくらい悪いのか、聞きたいことは山ほどあったが、母は起きているのもつらそうなので、身の回りの品を整理するだけで終わってしまった。

　後で父から廊下で、いつ頃から母の様子がおかしかったのか聞かれた。でも、わたしだって気づいたのはほんの数日のことで、父以上に長い時間接していたわけでもない。
「そうか」
　父も無口になっていた。いつもの様に陽気でもなく、かといってわたしを責めるでもなく、そのせいで余計にわたしの居心地は悪くなった。
「友香、明日は休みを取って母さんについててあげてくれないか？」
「あ、うん」

　次の日、わたしは図書館を休まざるを得なくなった。
　朝一番に、大前館長に電話して恐る恐る休暇を願い出た。初めての休暇願だった。
　もっとも、休暇を取る権利を行使できるほど勤めていなかったので、後日、調整するということらしく、母にお大事にと伝えるよう言われただけだった。わたしが休みを取ることで余り影響は出ないということらしい。骸骨と館長がが楽しげに雑誌を読んでいる光景が、ふと、頭の中に浮かんできた。

　母の入院も何となく長引きそうになり、前もって父から入院保険の書類を確認したいから探しておけと言われた。病状が大したことなさそうなので、だいぶん気楽にはなっ

ていたようだ。
　わたしは母の寝室の押し入れを引っかき回し、がさごそと書類の入ったフォルダーを探し当てた。色んな保険に入っていた。
　目的の書類の他に、茶色い古びた封筒を見つけた。
　名前はすすけて見えなくなっているが、地元に古くからあった産婦人科のものだった。何となく気になり、ひも止めになっている封筒をきれいに開け、厚紙になっているシートを取り出した。診療記録とかかれていて、二十四年前の日付だった。わたしが生まれるはるか以前だった。どきりとした。
　中をめくると、不妊治療を試みた記録の様だった。まだ体外受精がはじまってすぐの時代で、母の受けた治療はもっぱら検査とホルモン療法だった。そんなことをして自分が生まれたのだろうかと、疑問の目で記録を目で追っていき、治療がわたしの生まれた年のさらに二年後まで延々と続けられているのに背筋の凍る思いがした。――やっぱり。

　自分の存在とは無関係に母は妊娠しようと努力していたのだ。このとき、幼いときからあったもらい子意識は確信に変わった。
　でも、こんなこと母にも父にも言えないし、治療記録を見たことも感づかれてはいけない。わたしはその書類を再び封筒にしまい、厳重にひもをとじ、入っていた書類の一番下においてまたそのフォルダを押し入れの一番奥に戻した。
　わたしの額は脂汗にまみれ、前髪が張り付いていた。

　明くる日、図書館に行き、館長に昨日急に休んだことをわびて勤務についた。
　今日は、東側の通路に骸骨がいた。
「昨日はこなかったな？」
　まるでわたしを監視していたかのような言い方でとがめられた。
「有給です」
　わたしは目をそらしてしまった。
「ふぉふぉ、嘘を言うな。試用期間のお前に有給休暇などあるものか。そんなことはどうでもいいのだ。捨て子疑惑は晴れたかな？」
　骸骨に心の底を見透かされた様な気分になり、返事が出来なかった。骸骨はまたも一冊の分厚い、でも、表紙の薄い電話帳のような冊子を手にしていた。
　ふおふお、と気管から声を漏らしながら、冊子を、珍しく丁寧な手つきで書架に戻し、立ち去った。わたしがよく見ると地元新聞社の縮刷版で、不勉強なわたしはこれまで目にしたこともなかった。半年に一回発行されるみたいで、骸骨が手にしていたのはわたしの誕生日を挟んだ日付が入っている二十年前のものだった。恐る恐る手に取り、わたしは自分の生まれた日の新聞記事を読んだ。
　――やっぱり事件欄だろうか？
　わたしはなぜこの冊子を開いているのか、それもはっきりと意識しているわけでもなかった。もはや、骸骨の行動が完全に意識下に浸透しきっていた。
　三面記事の一番下に、駅前コインロッカーに赤ん坊！　　という見出しの記事が載って

いた。

　これでつじつまがあった。当時不妊治療をしていた父母はこのことを知らず、こうしてわたしは駅前に捨てられていた。治療をあきらめて養子をとることに決めた父母と、この後養護施設で育てられて当時四歳になったわたしとが出会い、そこで初めて父母の子になったのだ。

3.

３．

五月下旬、図書の配置換えがあった。落ち込んでいるわたしには重労働だ。

まとまって置いてあるから法律書とわかる本でも、一冊だけ単独で見つかると、哲学なのか文学なのか思想書なのかすら、わからなくなってしまう。

そう言うとき、助けてくれるのは山田さんだけだった。もっとも、館長がそれを見込んで日曜日にこの作業を入れたのかも知れなかった。

山田さんはせっせと働いた。

「元々近代の図書館はね、研究者の活動をバックアップするために出来たんだ。図書館司書ってただの貸し出し係じゃないんだよ」

「へぇ」

最近の山田さんは知的で、最初に抱いていた嫌みなイメージはどこかに去りつつあった。

わたしは郷土資料の中に地元の児童養護施設リストの記載された広報誌を見つけた。今度は骸骨より先に見つけることが出来た、が、これも彼女の計算のうちかも知れないと勘ぐった。市内には百五十近い施設があり、自分がどこで今の両親に出会ったのか探すのは難しいように感じた。

さらに、調べると、受け入れることの出来る児童の年齢に制限があることに気づいた。わたしはもう一度、新聞縮刷版の記事を確かめた。三月三日の早朝に駅のコインロッカーから赤ん坊の声がして、売店店員が気づいて警察に通報した。とあり、更に、へその緒も残っていて、赤ちゃんはタオルでくるまれていたと書いてあった。つまり、わたしの生まれたのは三月三日で、へその緒もついた生まれたてで捨てられたことになる。

わたしの誕生日とぴったり同じ日付なのは当然だ。

市内の児童養護施設のうち、零歳児の受け入れをしているのは、三カ所と一気に絞り込まれた。年齢が下がるにつれ、保育士一人当たりの受け持ち人数が少なくなるので、対応する施設は少ないらしい。この施設に併設される乳児院に引き取られた可能性が強かった。

水曜日、図書館の休館日にわたしはメモに控えた乳児院を一軒ごとに回ることにした。

個人情報の壁は厚く、やっと探し回ったところでも、何も教えてもらえなかった。弁護士でもないわたしはすごすごと引き下がり、それでも、一つくらいは親切なところもあるだろうと、歩き回った。

――一ノ瀬友香というんですが、記録はありませんか？

最後に残ったところでわたしは頑張った。

人の良さそうな園長さんだった。彼は仕方なさそうに机の上に記録簿を出し、わたしに見えないようにページを繰った。

「生年月日はいつだったかな」

「あの、それって、本人確認でしょうか？」

「一応ね、個人情報だから」

「平成十一年三月三日です」

「ふむ」

でも、そこにあるのは、わたしの名前ではなかった。

記録には別人の名前で、生年月日は同じで、五日間、病院で検査を受け、その後この乳児院に預けられたらしかった。コインロッカーに捨てられた赤ん坊が、警察に保護された後、検査のために入院したとしたらつじつまが合った。

「あの、たとえば、捨てられていた場合などですが、名前は誰がつけるんですか？」

へその緒のついた赤ん坊に名前なんてないと思ったのだ。

「さあ、普通は置き手紙とか何か身元を示すものが残っているものだけど、なければ、届けを受け付けた役所でつけることになっている」

「そうですか」

わたしは段々と聞くのが怖くなった。

多分、その赤ちゃんは四歳までここで過ごし、そして、今の両親に引き取られて改名したに違いない。そう思った。

とぼとぼと家に帰り、ふと思い立って押し入れの中を引っかき回し、わたしの写真を探し始めた。もし、赤ちゃん時代のものが一枚でもあれば、疑惑は霧のように晴れるに違いないと、思いは確信に満ちていた。

古い写真は全て、父と母の恋人時代と、結婚後しばらくまでで、それ以降のものは、リビングの棚にしまってあるアルバムの分しかなかった。このアルバムはわたしもしょっちゅう見ているので写真のシミの一つまで記憶している。この中のわたしは小学校入学式で始まり、短大の卒業式までが全てだった。だから、押し入れの中の古い分に、わたしの写真がないということは、小学校以前のわたしが家族の中に存在しないことを意味するような気がした。

気がつくと辺りが暗くなり始め、――夕食の用意をしなくては、と、立ち上がった。

八時頃父が帰ってきても、わたしは父の顔をまともに見ることは出来なかった。

「友香、どうしたんだ？　　お前まで具合が悪いと言うんじゃないだろうな」

などと、わたしにかまい続けたが、無理に笑顔を作り、なんでもないと答えたものの、かえって不自然だった。

4.

４．

六月になり、病院の内科病棟のベッドが空き、母もそれまでいた救急病棟から移ることになった。

わたしは父について荷物をまとめたり、点滴台のついた車いすを押したりするのを手伝った。

「お大事にしてくださいね。またこっちにも顔をのぞけて下さいね」

看護師は優しい言葉を掛けてくれた。どうしたらこんなに優しくなれるのだろうと、少しあこがれを抱いてしまう。救急病棟の看護師は皆若く、わたしと同年齢か少し上の人ばかりだった。

内科病棟は四人部屋で、他の患者さんにも話を聞かれそうで、母に細かいことを聞けそうになかった。

「あのさ、わたしの名前って誰がつけたの？」

大きな疑問をさりげなくベッドの母に聞いた。

「さあ、お父さんじゃなかったかしら」

「どうやって？」

「姓名判断の先生に見てもらって、いくつかの候補からかわいいのを選んだんだと思うよ」

その言い方にわずかながら人ごとの様なニュアンスが感じられた。生まれてから届けを出すまで七日間の余裕しかないのだ。姓名判断だの、細かいことをしている時間はないはずだった。やはり、四歳の時に引き取られ、その後に改名をゆっくりとしたに違いないと思った。

「話は変わるんだけど、お母さんって小さい頃、大きな事故に遭わなかった？」

「ええ？　変なこと言わないで」

母はとぼけた。

父に以前聞いた話では、中学生の頃に交通事故で大腿骨骨折をしたことがわかっている。きっとそのときにＸ線を浴びすぎて不妊になったのだとわたしは、もう、確信に近い思いを抱いていた。

「友香、どうかしたの？」

「ん、ううん、何でもない。お母さん背中さすろうか？」

「何だか気持ち悪いわね」

わたしは、わたしがもらい子だと言うことに気づいたことを隠すため、わざと明るく振る舞った。不自然なまでに。

日曜日、図書館に行くと山田さんは熱心に仕事をしていた。でも、よく見ていると、ボランティアの図書館員というのは便宜上だけのようで、何か自分の研究テーマを持っているようだった。館長に聞くと、彼が若い頃にも、もう一人そういう人を見たことがあると言っていた。図書館という地域の人が利用する機関の内部に入り、利用者を観察する必要があるテーマがあるそうだ。

わたしが彼のことを見つめているのが、向こうには深刻そうな顔に見えたらしかった。

「君、ひょっとしてまだ、もらい子疑惑で悩んでいるのかい？」

「え？」

そう、誰彼構わず、その話をしていたので、彼にももらい子だと言っていたことを忘れていた。

「別に悩んでなんかいません」

「ならいいんだけど、……人間って絶対的な存在だと普段は思っているけど、実際はそうではないんだよね」

わたしは意味がわからなかった。

「有は無であり、無だからこそ有である」と、彼は呪文のようなものを唱えた。

「有？」

わたしがよほどぼけっとした顔をしていたらしく、書架の陰で山田さんは解説してくれた。

「実体がないんだ。そういうものって、例えば網の目を考えればいい。網の目って糸と糸の間の空間にすぎないし、しかも、それ一個では網とは呼べない。つまり、実体がない」

「はあ、網の目」

「網の目は右の網の隣人であり、左の目の隣人でもある。つまり、隣の目があって初めて存在すると言える。実体がないから存在し得るというわけ」

「それと、もらい子疑惑と？」

「人間の存在もつまりは実体がないんではないか、そんな気がする。お父さんとお母さんの子供であり、子供の親であり、お兄さんの弟である。それを失うとたちまち存在を失ってしまう。そうじゃないかい？」

「ええ、確かに」

「つまり、そこには、君が考えるほど強い絆ではなく、かといって弱い絆でもない関係だけが存在する。実体なんてどこにもないんだ」

わたしは、山田さんの言うことが何となくわかった気がした。

その日、病院に見舞いに行くと、母が上半身を起こしてぼけっと窓の外を見つめていた。雑誌を読むほどの体力、気力もないし、点滴のせいで動かせない腕のストレスもたまっているに違いない。

わたしは、後ろから近づき、肩に手を掛けて背中をさすった。

「あれ、友香なの？」

母の声は明るく、わたしは涙が出てきた。

「ちょっと、どうしたのよ？」

「ご、ごめんなさい」

わたしは、もう気にしないことにして、今までもらい子だと思っていたことを母に伝え、これからは実の娘として頑張るから、ごめんねと泣きながら言った。
「あはははは」
泣きじゃくるわたしとは対照的に母は大笑いした。
「昔からもらい子恐怖症の所があったけど、まだ、直ってなかったのね」
「え、気づいてたの？」
「それに、そんな妄想が直らなかったら、もし、本当の母親だと名乗る人が出てきても同じじゃないの。しっかりしなさい」
「うん」
母は昔からわたしがときどきひょうきん者になるのも、全部、このもらい子妄想のせいだと気づいていたようだった。アルバムに写真がないのも、元々、カメラ趣味がなかったせいらしい。
「じゃあ、お母さんたちが結婚した頃の写真はどうして多いのよ？」
「ああ、あれね、……同じ時期に結婚したお友達のご主人がカメラ好きで、よく一緒に撮られていたのよ。でも、向こうに子供が出来て、そのうち疎遠になって。で、あなたが小学校に入る前にお父さん本格的な一眼レフカメラを買ったの。だから、昔の写真がないからって別に不思議がることはないからね」

わたしは、この日、一時間以上母の背中をマッサージしていた。言い訳はすごく不自然だったし、明るい態度もものすごくわざとらしかった。
でも、今日の昼間に山田さんと話をしてよかったと思った。
――人間は絶対的存在ではなく、人との関係の中でしか存在し得ない。
母が生みの母でなくても、もう気にしないでいいんだ。

悩みは吹っ切れたが、図書館には相変わらず、骸骨がいて本を読んでいる。次なる弱みを握ってどこから攻めようかと考えているかのようだった。

不思議なのは、山田さんは数年来この図書館でボランティアをしているのに、あの骸骨の存在を知らないということだった。わたしにしか見えないのだろうか。そんなはずはない、大前館長も知っていたし、彼女を見た小学生はびっくりしていたのだ。

その山田さんが、閉館後、初めて食事に誘ってくれた。了

暇な図書館

著　　黒川 文

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社